第二回文化講演会

「上杉謙信公」

越後一ノ宮　居多神社　宮司　花ケ前盛明氏

新潟の県都は本当は上越であった？

上杉謙信の時代のことを考えますと、五智を中心とした地域、これは越後国分寺、それから居多神社、というのがございます。それで春日山城、上杉謙信ですから中世の都市であると。それから今度は高田はですね、松平忠輝が一六一四年に築いた、近世の城下町であります。したがって上越市というのは、ともかく直江津の五智地区、それからまた春日地区、そして高田地区とこのように、三つの中心があるというふうにお考えいただければいいわけです。特に、上越は越後県都だったと朝日新聞はね、大きく報じているわけなんです。

越後の全体の、古代、特に奈良・平安時代、今から千年、千二百年前。その越後の中心はどこか。もちろん上越なんです。

そうして、一番はじめに国府がどこにあったのか、国府には国司がやってくる。要するに、今では県知事ですけれども。平安時代の初め、西暦の九二七年、もう平安時代っていうのは七九四年から平安時代ですから、平安時代の初期になりますね。九二七年。この延喜式という書物をみますと、越後の国府は頸城郡にありと、はっきりと書いてあります。

そして更に、中世においては、春日山城。上杉謙信は越後全体を掌握していたわけです。したがって春日山城、もちろんこれは越後の県都であったわけです。それから、松平忠輝が福島城に入り、更に高田にお城を築いた。一六一四年、江戸時代のごく初めです。この時にもやはり、松平忠輝は、上越から下越、それから川中島四郡、これを全部統治したわけですね。

その時の中心は高田なんですね。まあそのようにずっと上越は越後の県都であったわけです。

次の時代を見ていた松平忠輝

松平忠輝も、高田にあんなすばらしい城を造ったんですけども、二年後にはもう改易になってしまった。その改易の表向きの理由は、大阪の陣の際に、松平忠輝の軍の前を兄貴の徳川秀忠の家来が横切り、それを忠輝の兵を先導しているのが切ってしまったとか、ま、そんな程度のいろんな理由で、改易になったんだと言われてます。

実際はそうじゃなくて、やはり、松平忠輝っていう男は、非常に将来をみつめた大きな世界にやはり目を開いていた、そういう人物だったんだと考えられます。

言ってしまえば、キリスト教に対しても大変理解があった。そこら辺が、この徳川家康が、幕藩体制と申しましょうか、新しい時代を築いて、要するに江戸幕府を強固にする、がっちりしたものにする、そういうためには、松平忠輝のような、そういう考え方、ヨーロッパの文化を取り入れようとか、キリスト教を取り入れようとか、そういうことはマイナスになると。要するにキリスト教的考え方を抹殺をしたというのが、本当の理由であったろうと私は考えているわけです。今、そんなことから、上越はまず松平忠輝が七十五万石あったのが、最後は榊原で、十五万石になってしまった。こういう小藩になってしまったというわけです。しかしこの高田の地は、非常に重要な街道の分岐点でもあったわけです。

二つの街道が、加賀街道も北国街道も、みんな、高田に集まっていたわけです。それから、江戸幕府にとって、加賀前田百万石、これ大変怖いわけです。その見張りとしてもどうしても高田が必要だった。まあ、いずれにしても江戸幕府にとって、高田はもっとも重要な場所。そこにその六男坊、松平忠輝を置いたんだというところまではよかった。ですから当然新潟県も上越が県都になるはずの要素は持っていた。残念ながら松平忠輝が、あまりにも、越後だけでなくて世界に目を広げた、そういうような優れた人材であったということが、かえって県都が新潟へ行ってしまったということにもつながるんじゃないかなとこのように思っております。

直江兼続がNHK大河ドラマに？

次に、新しい情報、新潟日報の小説です。実は、この小説家、火坂雅志という小説家ですが、新潟市の出身なんです。まだお若くて四〇歳半ばを過ぎたくらいの年齢なんですが、『天地人』という小説を、今年の一月一〇日号から新潟日報に連載しています。

いったいこの小説はどういう意味があるのか、皆様方にお話します。今、新潟県、山形県、福島県の三県の県知事さんが会長になられて、直江兼続公をNHKの大河ドラマへという動きがであるんです。私も非常に、賛成をしている一人なんです。その大河ドラマの元になる小説、それを何にするかということで、火坂さんのこの『天地人』を新潟日報が依頼したと、こういうことに実はなるわけです。ですからもし仮に、直江兼続がNHKの大河ドラマに登場することになれば、おそらくこの火坂さんの小説が台本になるであろうと、まあそういうことであるわけです。これは不可能ではないというふうに思うんです。現段階では、NHKもなかなかウンとは言わないですね。

さて、『天地人』は初めは上杉謙信のことをずっと書いていたんです。でも中心はなにかというと直江兼続。なぜならば、あくまでも新潟日報は、大河ドラマの元になる小説を、との要求でありますから、直江兼続。そして、ちょうど今直江兼続が登場したところなんですね。今日の新聞をみてみましたら、ちょうど上杉景勝が春日山城を占拠するときに、周りは上杉景虎軍に囲まれている。そうすると食料や弾薬の春日山城輸送ができない。ということで、直江兼続が、単身この桑取谷へ行って、斉京という、有力者がいる。そこへ、こっそりと行って、なんとか協力してほしいと、要するにその食料を運ぶための、糧道、道について談判にいく。そんな様子が、今日の『天地人』に載っております。

謙信の考えた本当の後継者は？

上杉景勝というのは、上杉謙信のお姉さん、仙桃院というんですけれども、南魚沼郡六日町へお嫁にいかれた。坂戸町、これは国の史跡になっております。すばらしいお城です。ここへお嫁に行かれて、そして生まれたのが上杉景勝です。それを上杉謙信は養子に迎えていたわけです。だから上杉謙信は、心の中ではお姉さんの子供の景勝を自分の跡取、すなわち越後の大名にしようと思っていたと思うんです。そう言いましても、彼はついに語らずに脳溢血で倒れて、もう意識不明。そしてもう一人は、上杉三郎、景虎です。小田原城主、北条氏康の七男坊なんです。なんでその小田原の北条七男坊が上杉謙信のもとにきたのかといいますと、初めは、甲斐の武田信玄、静岡の今川、そして、神奈川県相模の北条が、三国同盟を結んで、上杉謙信に対抗していたわけです。ところが武田信玄は海賊がほしかった。そこで、三国同盟を結んだのを無視して静岡県に進出して港をもちました。これに対して、今川と北条はものすごく怒ったわけです。もうそんな武田信玄とは、手を結べない、ということで三国同盟は破棄された。そうすると北条は一匹になってしまったんです。武田信玄の軍勢がもろに小田原、北条に攻めてくるわけです。そこで北条氏は結局、越後の上杉謙信と手を結ぶとこういう形になるわけです。そして人質としてやってきたのが北条氏康の七男坊、三郎でした。

普通であれば人質ですから、当然この同盟が崩れた場合、破れた場合は必ず殺されてしまう。ところが上杉謙信は殺さなかった。しかも祝言をあげた。すなわち養子のひとりの景勝のお姉さんと結婚させた。これに対して父親である北条氏康は、本当に感謝して上杉謙信に、手紙を送っているんです。普通であれば人質ですから殺されてもしょうがない。それを養子として迎えてもらった。単なる養子じゃない。祝言まであげてもらった。父親としてこれ以上の喜びはない。こういう礼状を、上杉謙信に出しているわけです。また上杉謙信という武将はそういう手紙を全部保管してある。だから今の米沢には、大変な量の古文書がみんなあるわけです。

それほど上杉謙信は、敵の武将の子供を、なんで祝言まで上げさせたのかということですが、それは、やはり将来を考えたわけです。お姉さんの子供は越後のトップに、三郎景虎は関東のトップにしようと。上杉謙信は関東のトップと越後のトップ、両方兼ねていた。これは非常に大変だった。両方を束ねるのは。だから上杉謙信はそれを二人に任せようとこう思ったんじゃないかなと考えます。

それを生きてるうちに言えば良かった。二人呼んでね。お前たち二人はこういう私のつもりなんだと、だからひとつ仲良くやってくれと、しかも三郎は小田原の出身なんだから小田原に帰って、関東平野をひとつまとめてくれと。それが私の夢なんだとこう言っておけば、これはもうあんな戦争にならなかったと考えます。

謙信の財源は金と青苧

謙信が倒れたとき、春日山城の蔵には三万両のお金があった。もう大変な金です。上杉謙信は、生涯七十回あまり戦った。しかも関東に十三回の遠征。川中島に五回、更に能登越中に十回、京都に二回なんです。二四歳の時と三十歳。このときはもう長尾景虎。この長尾景虎というのは、京都の公家達は何も知らないんです。どんな山から出てきた男かというぐらいのもんです。長尾なんて全然知らないわけなんです。だから上杉謙信が二四歳の時に、第一〇五代、後奈良天皇に拝謁します。そのときにも金、銀を献上する。更にまた将軍にも、将軍の奥さんにも樽代。なんていうふうに書いてある。樽代、お酒のことです。でも実際にお酒を献上するんじゃないんです。ちゃんとお金を献上するということです。それか

ら御所。御所の門が朽ち果てていた。上杉謙信は傷んでいた御所の門を直す。こういうことで、京都の公家達は「景虎っていう男はすごい男だ」と。天皇、将軍をはじめとして、貴族達に本当に敬意を表してくれると。これからの新しい時代はやはり越後の長尾景虎かと、こういうイメージを植え付けたんです。

そんなお金を、ものすごく使ったわけです。そのお金はどうして作られたのか。いろいろ考えてみますとやはり金銀ですね。農業といっても、それはなかなかお金にならない。お米がとれるといいましても、そんなにお金にすぐ変えるっていうわけにいきません。

どこで金がとれたかと申しますと、岩船郡朝日村鳴海金山。これがまた謙信時代、たくさん産出したんです。それから佐渡では、今の相川金山はだめなんです。あれは江戸時代に入ってからなります。西三川砂金山、今、佐渡に行かれますと小中学生が川で砂金の体験をしております。あの西三川砂金山、あと景勝の実家の上田の銀山。これが金銀山。それから糸魚川にもあるんです。糸魚川の蓮華山というところです。ここは、ヒスイが取れるわけです。それだけやっぱり山は固い石があるわけです。だから当然、金も出ていいわけです。これは、まだ噂なんです。蓮華山から金がとれたという、そういう情報はないのですが、でも言い伝えはあるわけです。上杉謙信の経済力、それはあるわけです。上杉謙信の経済力、それはなんといいましても、金・銀であります。

それからもうひとつは青苧なんです。青苧、すなわち衣料の原料です。越後上布。それがずっと後になって小千谷ちぢみ、塩沢、十日町が産地になりました。

上杉謙信時代もやはり青苧というのは重要だったんですが、さらに直江兼続が、その青苧を積極的に栽培して、経済政策をやったわけです。

ケネディが有名にした十代目上杉鷹山

ちょうど亡きケネディ大統領が、就任したころの話で、日本の記者団がこういったわけです。「ケネディ大統領さん、あなたは日本の政治家でどういう人を尊敬しますか」その時に、ケネディは「上杉鷹山である」といった。ところがその当時、日本の記者は、上杉鷹山を知らなかった。その当時の高等学校の教科書には上杉鷹山はでてこなかったんです。ですからそんなの記者知ってるわけないです。その時に記者は面食らっちゃったわけです。上杉鷹山って何者かと。すぐもう日本のほうへ電話して、十代目の米沢の藩主であったと。

でも、十代目っておかしいんですよ。みんな米沢の上杉鷹山を十代目って言うけど、私がいくら数えても九代目なんです。なんで十代って書くんだろうかと、よく考えてみたら上杉謙信が初代なんです。上杉謙信は春日山城で亡くなって、そして大きな甕の中に入れられたわけです。漆で固めて、米沢に持っていった。だから春日山城で亡くなっているんです。だから米沢にとっては初代ではないんです。それをその米沢の人たちは上杉謙信を初代として、ちゃんと厚く祀って、米沢の上杉家の御廟所の中央の一番奥に上杉謙信のご遺体が埋まっているわけです。

上杉謙信の女性達

なぜ上杉謙信が結婚しなかったか。ところが、噂ではいろいろあるわけです。その一人が、京都の関白近衛前嗣の妹、絶姫という非常にきれいな女性が上杉謙信に思いを寄せた。ところが上杉謙信は、結局、越後に一緒に帰ろう」なんてことは言わないで帰ってきてしまった。そうしたら、その絶姫は翌年、重い病にかかって亡くなったという言い伝えが残っているんです。それで私も、数年前でしたが調べてみました。「公卿補任」という、また「尊卑分脈」、要するにその公家さんの家柄の系図が残っている。それをみましたところ、残念ながら、絶姫という女性はいなかった。しかも独身で、上杉謙信が上洛したその翌年に病にかかって亡くなったなんて言う女性は全然系図には出てこないわけです。ということを考えると、その絶姫という女性が本当に実在したのかどうなのか、これはあやしいと、あやしいけれども、そのように言い伝えられているわけです。

もう一人は、上杉謙信は三十一歳の折に、関東へ出陣しました。そのときに、群馬県の平井城主城主、千葉采女。その娘、伊勢姫。その彼女を、今度、上杉謙信の方で是非、越後へ連れて帰りたいとこう思ったというんですね。ところがそのそ

れに対して、柿崎和泉守は、他国の女性を妻にすることは非常に危険である。それはそうでしょうね、夜、グサッとやられれば、それで終わりですからね。だからおよしなさいという進言したわけです。そのために上杉謙信は伊勢姫を連れて帰ることを止めた。翌年、その伊勢姫はまた病にかかって亡くなった。みんなもう、上杉謙信のそういう伝説は全部翌年重い病に罹って亡くなったと。それで、私、この言い伝えについても調べてみました。まず千葉采女、そんな武将はいなかった。いろいろ資料を調べて、全然いませんでした。ましてやお父さん、采女というのも、いないんですから、娘、伊勢姫なんていうのはすないと。だからどこで、いつごろからそういう伝承というか、物語が形作られていくのか、非常に、おもしろいことだと思うんです。

まだおります。三島郡与板町。そこに与板城があるんです。そこに直江という、上杉謙信の有力な奉行なんですけど、その直江の娘さん、彼女がやはり上杉謙信に思いを寄せて身の回りの世話をしていた。ところが謙信は全然、「俺と結婚しよう」と言わなかった。ですから、これも翌年、亡くなるんじゃないんです。善光寺さんに入って、出家してしまった。こういうような話も残っています。

まあ、いずれにしましても、上杉謙信は全然、まあなんていいましょうか、女性の影が全然ない。ところがひとつだけ和歌があるんです。祈恋といいまして、恋を祈るというそういう、なまめかしい、紛らわしいような和歌が残っている。それには、ある女性を思った和歌なんですけれども、これは今日、上杉家にちゃんと残っている。ということを考えると上杉謙信は恋をしていたんじゃないかなと。では誰か。わかりません。上杉謙信もやはり人の子ですから、恋もしたんじゃないかなと、その時にそういう和歌が生まれたんじゃないかなと、まあそういう事実もあるという和歌ですね。

何故、謙信は生涯不犯を守ったのか？

上杉謙信はなぜ結婚しなかったのか。上杉謙信が二十四歳の折に第一回目に上洛をします。そのときに、彼は高野山へ上ります。更にまた下ってきて、そして紫野の大徳寺、この大徳寺にやはりお参りをするわけです。その時に、大徳寺の偉いお坊さんから、いろいろ三帰五戒という仏教の教えを受けるわけです。

その中のひとつに、女性に近づかないというのがあるわけです。五戒のひとつ、まあ大酒飲んじゃいけないとか、盗みをしないとか、人を殺さないとかね。でも実際考えてみて、上杉謙信は大酒飲んでるわけですから。女性だって近づけたっていいじゃないか、こう思うんですけれども。そういう女性とみだりに、女性に近づいてはいけないってお坊さんですからね、そうなんですけれども、そういうその三帰五戒というひとつの教えを受けた。

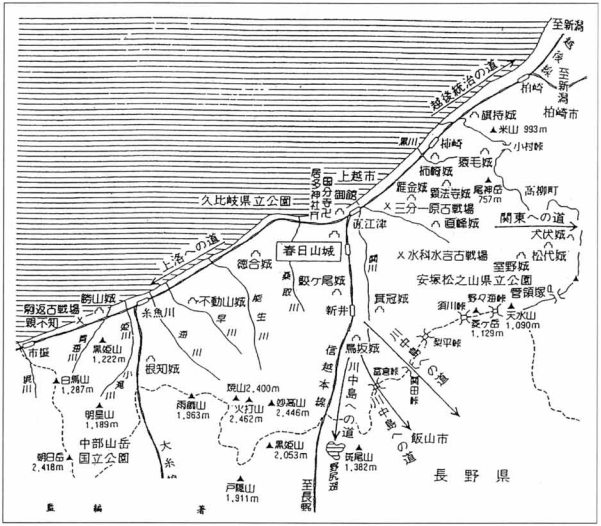
そのために上杉謙信は女性を近づけなかった。二十四歳の時の大徳寺の徹岫宗九という偉いお坊さんの教えを受けて、そして仏門に入った。そのために女性を近づけなかったんだと私はいつも書いたり、お話したりするわけです。そうすると相手の方もまあ納得して、仏門に入ったんだからしょうがないなと、こういうような形で納得してもらっているわけなんです。とにかく、女性の問題については、全然今のところはわからないんです。

謙信は天下を取るつもりだった？

さて、いろいろありますけれども、次に、あと時間も終わりになります。まずこの、上杉謙信が、天下を獲るつもりがあったか、なかったかと、いうことになるわけです。

手取川の戦い。これは石川県石川郡美川町、また是非、向こうへ行かれたら、この石碑のところへ寄っていただきたいなと思います。なんか私の分身のような気がいたします。私も行って見て参ったんですけれどもね。

とにかくあの、この手取川の戦いで、上杉謙信、織田信長の軍勢、柴田勝家、前田利家、そしてこの佐々成政、あの織田軍を、約四万八千。これを打ち破ったのが手取川の戦いなんです。それで上杉謙信の、勢いというかそれに圧倒されてしまった。そして七尾城に上ります。その時に関東の武将に、こう言っているわけです。『織田軍は案外弱い』と。『この分なら天下を平定することは簡単です』と。まあこのように手紙を書いております。従って私はね、上杉謙信は天下を獲るつもりがあったんだと。

ですけれども、他の武将と違って、あくまでも謙信は天皇や将軍を盛り立てて、そして自分は越後の地で毘沙門天の化身となりたい、こう思っていたんじゃないかなと思っているわけです。決して、謙信は自ら天下に号令をかけるっていうんじゃなくて、やはり、天皇、将軍を立て

ようと。それはちゃんと古文書が残っているんです。将軍に対しても、たとえ自分が一兵になろうとも、ひとりになろうとも、将軍のために最後まで戦いますと、尽くしますといっています。こうやって古文書残っているんですから、嘘じゃないわけです。たとえひとりになってもと、こう言ってるんですね。景虎ひとりになろうともと。だから、そういうことを考えると、やはり上杉謙信、保守的な男であったんだということになるわけです。